The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サポートグループの構造と機能に関するコミュニティ心理学的研究
Author(s)	良原, 誠崇
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58485
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	良（よし）　原（はら）　誠（まさ）　崇（たか）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２４２９９　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	サポートグループの構造と機能に関するコミュニティ心理学的研究
論文審査委員	(主査) 教　授　井村　　修 (副査) 教　授　藤岡　淳子　　教　授　渥美　公秀

論文内容の要旨

臨床心理学，あるいはコミュニティ心理学の分野において，サポートグループはこれまでほとんど脚光を浴びることがなかった．それは，サポートグループの定義や構造の曖昧さに起因していると言えるだろう．そこで本研究は多角的な角度からサポートグループを照射し，心理学的アプローチ中としてのサポートグループの臨床的評価を行うものである．本論文は5章構成であり，以下，各章の内容をより詳細に提示する．

第1章では，新しい臨床心理学パラダイムにおけるサポートグループの展開を述べ，これまでのサポートグループに関する先行研究を概観し，他のグループアプローチとの関連について整理した．これまでの臨床心理学のパラダイムにおいてサポートグループの輪郭を捉えることは容易ではないが，コミュニティアプローチとして捉え直したときに，グループアプローチそのものがコミュニティアプローチとしての性質を帯び，その中でもサポートグループが，セルフヘルプグループと同様のナラティヴコミュニティとしての機能を果たしているという点でコミュニティアプローチとして強調でき，さらに本邦においてはセルフヘルプグループ（自助グループ）以上にセルフヘルプの概念を尊重した構造を果たす可能性があることを指摘した．

第２章では，近年社会的に知られる存在となった自死遺族を対象にした，サポートグループの運営者７名に対して面接調査を行い，社会構成主義的グラウンデッドセオリーに基づいたモデル生成を試みた．それによると，運営者は参加者に対して直接的な働きかけを連続的に行いつつ，同時に運営者間における自死遺族をめぐる物語については個々に相対化していく作業によって成り立っていることが示唆された．そして，その作業の際に重要になるのが運営者個人のコンテクストであった．自身が当事者であれ非当事者であれ，自身の活動について，過去の喪失体験を引き

合いに出すことによって，１つのライフストーリーの語りとして表現していた．そして断片化した悲嘆の表出や援助のあり方や関わる人の属性についての「とらえ直し＝次元を１つ上げた同一化」という新たな秩序の編成を行いつつも，“均質化”がグループの目的にはならず，体験を並べて参照し合う，ただそれだけの合意によって集団的共同性を維持し，その実践による自身の活性化が、個人の生活上の物語や価値観を書き換えたり、あるいは豊かになったりしていくことを可能にしていた．

第３章では，ある自死遺族のサポートグループにおける３年間の参加者の志向の変化と継続動向を量的に捉えたものである．結果は５つの特徴が導かれた．性差については女性の方が男性よりも関与度が高く，また近年の社会的認知の高まりやグループの会場の文脈も参加に影響を与えていた．グループへの志向についても参加回数に伴って変化しており，継続参加することによって，具体的な支援の希求から体験の共有への希求か，あるいは志向の曖昧化が示された．また，初回離脱についてはいちかいに単純に失敗と見なすよりは，一度の参加で必要なサポートを得ている可能性が示唆された．

第４章では，実際に筆者によって筋ジストロフィー患者家族を対象にした短期型サポートグループの実践について論じたものである．ここでは Rapapport (1993) の規範的なナラティヴコミュニティ概念を援用し，毎回筋ジス療養に関係する家族や専門家に，医療的な文脈ではなく一人の関与者としての語りを提示してもらい，その後，そのテーマに沿った参加者同士の体験の共有を図った．その結果，比較的経験の浅い家族には将来起こりうる問題について前向きに検討するようになったり，個々の取組や感情について相互承認が生起したり，またいずれの参加者も一方的な関係に留まらないといったことが観察された．また家族機能測定尺度を毎回測定したところ，凝集性について緩やかに減少しており，グループへの関与が，過剰や家族の凝集性を緩和し，適度な距離を取ろうとする現れではないかと考えられた．

第５章では，以上の内容を踏まえて，サポートグループの構造と機能について論じた．サポートグループは，２層化されたコミュニティを有し，相互作用の関係にある．コミュニティ間は心理的な交流関係のみならず，実際に行き来を可能にする．メンバーのコミュニティは，従来のセルフヘルプグループと共通しており，そこには規範的なナラティヴコミュニティの元，メンバーは普段の人間関係と異なる安心感の元，「居られる」ことができる．そしてメンバーは直接的な対人交流をするよりは，その規範的なナラティヴとの交流を行う．

ナラティヴコミュニティにおける規範的なナラティヴは従来の心理学的アプローチにも見られるようなメタナラティヴがあり，その交流は，個人のナラティヴを再構成させることができる．その再構成されたナラティヴは，他者からの承認を得ることによってその力を得ることができる．そこで，運営側のコミュニティは，そうした場を守ることの他に，そのナラティヴの証人となり，外の世界への接続を促し見守る役目も果たす．したがって，サポートグループを構築することによって，そうした複数の機能が期待されるのであり，新たな協働の形として位置づけることができるのである．

一方で，問題点がないわけではない．従来の臨床的技法とパラダイムが異なることは，サポートグループの持ち味であると同時に，課題や限界となる可能性もある．厳密な枠組みや技法に寄らないということは，それだけ運営者側のもつ文脈に強く依存する可能性がある．つまり，例えば「自助グループ」と比べて中性的な名称としてそのグループアプローチをサポートグループと位置づけたところで，そのメタナラティヴから逃れることはできない．そこで重要なのが，当事者の置かれている環境や，運営する側自身の制度分析である．運営する側のもつ背景，動機，また当事者や社会との関係について問い直す営みが重要であると考えられる．

論文審査の結果の要旨

本研究は 多角的な角度からサポートグループを照射し， 心理学的アプローチとしてのサポートグループの臨床的評価を行うものである．

第1章では，新しい臨床心理学パラダイムにおけるサポートグループの展開を述べ，これまでのサポートグループに関する先行研究を概観し，他のグループアプローチとの関連について整理した．

第２章では，近年社会的に知られる存在となった自死遺族を対象にした，サポートグループの運営者８名に対して面接調査を行い，社会構成主義的グラウンデッドセオリーに基づいたモデル生成を試みた．

第３章では，ある自死遺族のサポートグループにおける３年間の参加者の志向の変化と継続動向を量的に捉えたものである．グループへの志向についても参加回数に伴って変化しており，継続参加することによって，具体的な支援の希求から体験の共有への希求に移行することが示された．

第４章では，実際に筆者によって筋ジストロフィー患者家族を対象にした短期型サポートグループの実践について論じたものである．その結果，個々の取組や感情について相互承認が生起し，またいずれの参加者も一方的な関係に留まらないといったことが観察された．

第５章では，以上の内容を踏まえて，サポートグループの構造と機能について論じた．サポートグループは，当事者と支援者という２層化されたコミュニティを有し，相互作用の関係にある．コミュニティ間は心理的な交流関係のみならず，実際に行き来を可能にすることが明らかとなった．

本研究は，サポートグループをナラティヴコミュニティととらえ，個人のナラティヴを再構成させることができることを示した．従来，セルフヘルプグループと呼ばれていたグループアプローチを，構成メンバー間の相互作用だけでなく支援者との関係も視野に入れ，ナラティヴコミュニティの視点から分析した研究として高く評価される。